
予定犯罪

榎 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

予定犯罪

【Zコード】

Z8977C

【作者名】

檻 麻容

【あらすじ】

一通の手紙から始まった出会い。超能力を持つ少年が求めたのは、事件の解決だった。真相が初めからわかっている事件で、少年が求めるものは。

1・手紙

何かが引き金となつて壊れてしまつ。

そんな事が多いから。

だから犯罪が無くならないんだ。

「これが真実なら…知らなくて良かつたのかもしれない」

「それでも、真実は真実として受け止めなくてはいけないよ」

不知火唯は目の前に座り、冷たい微笑を浮かべる少年を見て溜め息をついた。

色素の薄い灰色がかつた細い髪。深く、何も映さない瞳は闇のような漆黒だった。

全体の雰囲気が速水零^{はやみれい}に似ているトコロが親類だということを表していた。

「一体何がしたいの？」

「ゲームだよ、ゲーム。全ては君に懸かっているんだ」

木製の椅子がギシッと軋む。背凭れに肘を置いて楽しそうに笑う少年。

事の始まりは一通の手紙だった。

梅雨前線が通過した次の日、澄んだ風と共に一通の手紙が運ばれてきた。

それを受け取ったのは零だった。それは偶然なのか必然なのかわからない。自然のようだったが、零はどこか意図的なモノを瞬時に感じた。気配で感じる感覚があった。

手に触れた瞬間、零は思わずその手紙を投げた。音もなく、ゆっくりと落ちる手紙から田^だが離せなかつた。

手に残るのは、一秒でも長く持つていたくないような生理的拒否だつた。

「零？」

零のその行動に驚いた源令香^{みなねか}は、訝りながらも落ちた手紙を拾おうとした。

しゃがんで触れようとしたその時、

「触るな！」

零は叫んだ。その声に近くにいた唯、令香は動けなくなつた。絶対的な命令。

今まで一度も聞いたことのない、零の声。威圧的で、しかし怒りはこもつていらない警告の声。

麻生亮^{あそうりょう}はその中で唯一普通に動き、手紙を拾つた。

「僕はいいんだよね？」『触るな』だから『感應する能力』に影響するワケだよね

『感應する能力』、それは『未来を予知する能力』を持つ唯と、『人の心が読める能力』を持つ令香、そして『過去を見る能力』を持つ零のことを指していた。零の警告では、この中で唯一『物を動かす能力』を持つ亮だけが、触ることができる。

無言で頷く零を視界に入れながら、亮は手紙に触つた。

「その手紙……記憶がないんだ」

平然として封を開ける亮に近寄り、零は鋭い目で差出人の名前を見た。

やつぱり、と確信に変わる。

『速水彩』

「はやみ……あや？」

「『さい』。男だよ。で、従弟」

亮の間違いを正し、零は視線を逸らした。見覚えのある筆跡が零に残る彩の記憶を鮮明にした。

「従弟？ 従弟からの手紙がなんで危ないの？」

普段通りのペースに戻った空氣の中、怜香は亮に近づき、触れな
いようにして手紙を覗き込んだ。

「『記憶がない』っていうのが引っかかるんだけど」

唯は零の方へ近寄り、瞳を真っ直ぐに見た。

零の瞳に浮かぶのは、優しさとそれ以外の何かが混じった複雑な
モノだった。

「彩の能力は『反能力』。すべてを打ち消すんだ」

「どういう風に？」

「言葉使って。多分、今回のは『手紙の過去』を『打ち消し』たん
だ」

今まで出会ったことのない能力に、零を除く三人は息を飲んだ。
つまり今回、能力は役に立たない。

「なんで今頃・・・。彩は何を望んでいるんだ？」

零の呟きは唯だけに届いた。

開かれた手紙の中にはたった三行の文があった。

不知火唯は一人だけ仲間を連れて手紙から読み取れる場所へ。
それ以外の者はマンションへ残ること。守らないと唯を殺す。

ゲームの始まりだよ？零

冷たいコンクリートに囲まれた密室。それは廃屋のビルの中だつた。

どこからか隙間風が来て髪を揺らす。寒さを感じ、唯は無意識に手を擦り合わせた。

「じめんなさい・・・呉さん^{くれ}」

唯は『一人だけ仲間』に呉を選んだ。警部の肩書きを持つ、見た目は二十代半ばの呉は唯に薄い笑みを向けた。

能力は役に立たない。使えるのは頭脳のみということになる。呉は『仲間』の中で誰よりも信頼されていた。伶香でさえも懷いている。今、力になれるのは他の誰でもない、呉だけだった。

「気にしないで。ただ気になるのは・・・」

「僕の情報が少なすぎるのこと?」

二人が顔を見合せた瞬間、本当に一瞬で少年は現れた。

「ハジメマシテ唯、呉さん

真ん中に置かれた木製の椅子に少年は座っていた。

黒一色に統一された体。肌だけが白く、目を引いた。少年は闇を含んだ瞳を細め、唯を睨んだ。

「流石だね。呉さんを選んで正解だよ。ゲームには有利だ」

「一体何がしたいの?」

「ゲームだよ、ゲーム。全ては君に懸かっているんだ」

「さあ、ゲームの内容を聞かせてもらえる?」

「ふーん・・・乗り気なんだ? さては零だね。彼が君に言つたんだね? サしづめ『彩は君に何かを望んでいる』ってところかな? 唯は微動だにせず、彩の言葉を聞いていた。まったくその通り、零は『その言葉』を言つた。そしてそう言われるとも言つていた。何処まで一人は似ているのだろう、と疑問に思つ。

呉は無言で一人のやり取りを聞いていた。その呉に、彩は一瞬だ

け視線を移した。その行動に意味はなかつたはずだったのだが、呉の頭の中には残つた。

まるで誰かと重なる。すぐに思い立つた人物は彩の血縁で、彩は出会つた頃の彼に似ていたのだった。

椅子から立ち上がつた彩は腕を組んで、二人に対峙した。唯は隣に呉がいるため少し緊張は解れ、表情を緩めた。自然と口調が柔らかくなつていた。

「・・・本当に何かを私に望んでいるの？」

「さあね。僕は怜香のようなテレパスじゃない。答えを知るのはゲーム終了の時だ」

3・ゲーム

「ルールは簡単。呉さんが謎を解くこと。OK? 軽い調子で淡々と言ひ彩に、呉は無言で頷いた。彩はそれを確認すると、腕を解いて右手を上げた。パチンッと指が鳴る。

「これは実際にあつた事件だよ。さあゲームの始まりだ」

「三ヶ月前のあの日の出来事は今『見えない』」

一瞬にして空間が変わった。

コンクリートの壁は、ある研究室へと変わった。
「藍！」

うつ伏せに倒れている女性、藍に駆け寄り抱き起こす青年の顔は蒼い。室内には蜂が何匹か飛んでいた。そして、先程まで藍が座つて眠っていたパイプ椅子が倒れていた。

青年は蜂に注意を向けず、ただ藍だけに集中し、腕を取り脈を確かめた。何の反応も示さない腕の次に首へと手を当てる。脈がないことを信じたくないというように、蜂に刺される感触さえ、気にしていなかつた。

「堂島くん・・・」

「駄目だ・・・死んでる」

堂島は藍を一度強く抱き締め、ゆっくりと横たえた。淡い、黒の髪が広がる。

もう動かない、体。

「致死量の毒を持つた蜂はいなかつたはずだ。・・・まさか」
藍の白衣を捲った堂島は予想が当たつていたことに驚愕した。そして同時に怒りが込み上がつてきた。

「LJの死骸・・・」

一点を見つめたまま離れない視線。

蜂に刺された痛みはもう感じてはいなかつた。

「堂島くん！　あなた刺されていいじゃない！　早く手当をしないと」

高橋の声が虚しく響く。堂島の耳には何の音も入っていなかつた。

断片的に現れたこの光景に、吳は何かの意味を感じとつた。

彩の意図するトロロは。

4・事件

「これがその事件だよ。藍は死んだ。蜂に刺されてね
藍、堂島、その他の登場人物はまだドラマのようない物語を作つて
いた。

彩達の姿は見えていない。なぜなら、この世界は二ヶ月前の事件
の日だからだった。

「部屋は密室。密室と言つても鍵は開いていた。蜂は実験用に育て
ていたのが何故か飛び回っていた」

彩は倒れている藍と警官、その他の関係人物を目で追いながら咳
いた。無意識的に視線は藍へと向いている。

その日には今までなかつた憂いがあつたのを、唯は見逃さなかつ
た。

「藍さんって・・・」

「皆さんはどういう関係なのですか?」

唯の問い掛けは警察官の声にかき消された。

一方的に始まっているドラマ。唯はその劇をじっと見つめたまま
動かない。

ずつと堂島の隣にいた女性が代表して答えた。

「薬科大の研究仲間です。藍さんと堂島くんがAチームで私、高橋
と松田くんと長谷川さんがBチームで研究していました。研究内容
は『虫の毒』について。今は『蜂』がテーマです」

「人物関係はいらないよ。この事件で解くのは謎だからね。まあわ
かつてると思うけど、藍と堂島は付き合つていたんだ」

丁度良いタイミングで彩は話す。今進んでいるのは人物関係の話
だった。

「藍の体には多数の蜂に刺された痕が残つていた。白衣に何匹か蜂
の死骸が残つていて、室内の蜂は一匹ずつ多種いたんだ」

「容器が開いていて、密室だったんですね」

警官は苦虫を潰したよつた顔になつた。彩はそれに対しても舌打ちをした。表情は本当に悔しそうで、唯はある疑問が確信に変わつていくのを感じた。

「あれ？ 長谷川さんは部屋に入つていませんね」

「ええ・・・堂島くんの声がいつもとは違つていたので。あと松田くんがドアの前に立つていて入れなかつたんです。・・・見せないようにしてくれたんです」

長谷川は目を逸らした。その瞬間に眞と目が合つた。いや、視線が重なつただけだつた。これは映画のようなモノだ。眞は劇から目を逸らし、彩の方へ向いた。

彩は微笑し、指を弾いた。

「結果、偶然密室で、偶然刺されたということになつたんだよ。警察は事故としてこの事件を終わらせたんだ」

パチンッ、と軽い音が響いた。

5・事件2

研究室の中には高橋、長谷川、松田、そして今より表情が豊かな彩がいた。時間が変わっている。

「あははっ そうなんですか？」

「そうなのよー。もう山なんて行きたくないわね」

楽しそうに笑っている彩の隣には高橋が座っていた。高橋は困ったような表情を浮かべて彩を見ていた。その光景は姉弟のように見える。

真ん中には円形のテーブルがあつた。主に談話の為に利用されている空間だとわかる。高橋の隣には長谷川、松田と並んでいた。「僕はよく研究室に行っていたんだ。理由はどうでもいいよね？皆と仲良かつたよ。・・・僕がそう思つてingだけかもしれないけど」

彩はゆっくりと、座っている過去の彩の方へと歩いて行った。

「私、ハチ駄目なのに高橋、無理言つんだもの」

「あーアレね。でも松田くんもキノコ、駄目だつたよね？」

高橋の問いに松田は苦笑した。右手をぶらぶら振つて彩に笑つた。

「前に毒キノコを食べてね・・・それ以来駄目なんだ。笑い系だったんだけど」

「大変だつたんですね・・・僕は蛇に噛まれたことならありますよ

「えー君こそ大変じゃない。松田くんなんて目じやないよー」

長谷川は松田の背中をバンバン叩いた。咽る松田。

高橋と彩は顔を見合させ、笑つた。

確かに彩の言つた通り、仲は良かつたようだつた。

「何やつているんだ？ 少しくらい手伝つてくれてもいいだらう・・・

・。彩、藍はもうすぐ来るから」

両手に機材を持ち、器用にドアを開けて堂島が現れた。それと同時に、現実の彩は座つていてる彩に後ろから抱きついた。

「堂島さん・・・あなたのせいじゃないよ」

「ここからはヒントだよ。僕が持つている情報を平等にあげる」
彩は登場人物になりきり、田の前に現れた堂島に声をかけた。現実の彩と過去の彩が重なる。

「堂島さん、この蜂、研究室にいますか？」

彩はいつの間にか一枚の写真を手にしていた。そして堂島の眼前へと移動させた。

堂島はじっくり見た後、少し考えてから彩の方へと視線を移した。
「いたけど、今はいない。遊びに来ていた他の研究員が刺されたからな」

「そうですか・・・」

少し安堵の表情を見せた彩に、堂島は苦笑した。

「大丈夫。ちゃんと知っているから」

今ここにいるのは偽者の堂島だとわかっているが、彩は顔が緩むのを抑えられなかつた。その彩の表情は唯には泣きそうで、何かを我慢しているように見えた。涙以外の何かを我慢している。唯の思考を遮るように、再びコンクリートの壁が現れた。

「アナファイラキシー・ショック」

「！」

ぱつりと呟いた呉の言葉に、彩は目を見開いた。

「藍さんは一度、蜂に刺されたことはあつた？」

「小さい頃に・・・」

彩の肯定の言葉に呉は一度頷き、言葉を続けた。

「一度蜂に刺されると、人間の体にはその蜂に対する抗体が出来るんだ。抗体を持つ人間が再びその蜂に刺されるとアレルギー反応を起こす。この反応の激しい状態をアナファイラキシー・ショックといふんだ。場合によつては死に至る、と聞いていたけど」

呉はゆっくりと、一言ずつはつきりと語つ。

「犯人は・・・多分だけどBチーム全員じゃないかな。長谷川さんは部屋に入らなかつた、というのがひつかかるね。彼女は『ハチが駄目』だつた。『複数の蜂』。多分彼女が一度刺された蜂も入つていたんだろう。だから松田さんは彼女をドアの前で止めた。そういう役なんだろうね。あと堂島さんが呟いた『この死骸』。アレが『いないはず』のアナファイラキシー・ショックを起こした蜂だつたんだろう」

松田の言動。そして部屋に入らなかつた長谷川。複数の、蜂。

「・・・何故助けてくれなかつた！」

彩は椅子を蹴つた。木製の椅子は簡単に壊れた。

「何故姉さんを助けてくれなかつた！ 警察は姉さんの命を価値のないものにしたんだ！」

「やっぱり・・・藍さんは『姉』だつたのね」

今にも呉に掴み掛かりそうになつてゐる彩の腕を唯は掴んだ。彩は驚いて唯を見た。

「やっぱりって・・・」

「『藍』って呼ぶのに慣れていなかつたから。あと似てるしね、色素」

「ははっ・・・ゲームは君達の勝ちだ。僕は負けた」

自嘲氣味に笑う彩に、唯は掴んだ手に力を込めた。
今、離すと消えてしまう、そう予感した。予知ではなく、予感だつた。この従弟は彼に似すぎている、と唯は感じた。いつも唯達の近くにいる彼に。突然消えてしまいそうな空気を纏っているのは血縁だから、と理由だけではないような気がした。根本的に、性質的に零に似ている。

「偶然部屋に蜂がいて、偶然容器が開いていて、偶然白衣に止まつていて、偶然刺された？ それが『偶然』じやないってことくらいわかるだろ！？」

「警察だつてこの結論には到達したはずだ。それなのに何故？」
呉は最後まで引っかかっていた疑問を口にした。

そう、すぐにわかつたはずだった。事故なんかではないのは明らかだ。偶然は必然過ぎた。

彩は下を向いた。自然と声が沈む。

「・・・あの人たちの親は政治家、弁護士、医者なんだ。『必然』な『偶然』は『事故』なんだよ」

唯は少し、ほんの少し彩の手が震えているのに気付いた。何かを隠している。

本当に知つて欲しい何かを。

「何故そんなに罪深く感じているの？」

はつ、と顔を上げた彩の視線の先にいたのは真つ直ぐ見つめる唯で。その瞳に映っているのは慈愛のよつにも同情のよつにも見えた。確信出来たのは思いやりだけで。

「僕があの人たちに蜂の種類を教えたから・・・僕が姉さんを殺したんだ！」

「違うわ！ 罪を背負うのはあなたじゃない。あなたが用意したのは火薬だけ。それを調合して火をつけたのはあの人たちなのだから

原因は彩。しかし過程は彩ではなく高橋達。原因を作った罪を知つて欲しかつたのは事実だつたが、認め、それでも悪くないと言ってくれるとは予想していなかつた。

彩の瞳が揺れた。

「僕は零が羨ましかつただけなのかもしれない。仲間がいて、幸せに暮らしている零が。・・・勝ちたかつた・・・そつすれば」

「彩が私に望んでいるのは『未来』だわ！」

はつきりと言つた唯に彩は口を噤んだ。

腕から伝わる温もりが思いの他心地良かつたのと、瞳に少しも怒りが籠つていなかつたからだつた。

「すごいよね・・・唯も呉さんも。早く出会いたかったよ・・・

「待つて！」

「僕は今、ここにいる」

彩はここに『いる』ことを打ち消した。

一瞬にして彩はいなくなつた。残つてているのは壊れた椅子だけだつた。

「これが真実なら…知らなくてよかつたのかも知れない」

「それでも真実は真実として受け止めなくてはいけないよ

真実は残酷だつた。不確定なままだつたら彩は少しは救われたのかもしれない、と思う。しかしそうことを望んだのは彩だつたのも事実で。どうしようもないジレンマだ、と唯は目を伏せた。今まで彩の腕を掴んでいた手を見た。

確かに感じた体温。外見からは感じられない人間らしさを感じた。

「あの日、あの時居たらなんて考えるだけ無駄だけど・・・考えてしまいますよね」

「そうだね。でも少なくとも彼は救われたんじゃないのかな。彼はまたきつと現れるよ」

呉は唯の肩にそつと手を置いた。呉は逆のことを言つ。知つたから救われた、と。結局は彩にしかわからないことなんだ、と納得し

た。

黙の優しさに微笑し、唯は振り返った。
「黙さんの予言は当たりますもんね」

7・水野医院

「・・・彩?」

水野医院を訪れた唯、零、呉の前にいたのは紛れもなく彩だつた。水野の前の患者用の椅子に座り、二人は仲良く話している。それはどう見ても初めて会つた一人、という光景ではなかつた。何度も会つたことがある親しさが表れていた。

ドアが開いたのに気付いた彩は視線だけを移し、軽く言つた。

「久しぶり。元氣だつた?」

呆然として言葉の出ない唯、零に対し、呉はやつぱり、と呴いた。何処か確信していた節がある呉の呴きに唯は、前に聞いたセリフを思い出して小さく口に出していた。

『彼はまたきつと現れる』

零もそれを聞き逃すはずもなく、彩から視線を外し、呉を見た。
「やつぱりつて・・・『きつと現れる』ということは」

「水野がね、患者に面白い人がいるつて言つてたんだよ。死体の写真を見せて、死因は何かつて訊いてきたつて。結局その時は何も教えてくれなかつたけど」

「それで『また現れる』ね。やつぱり呉さんのお預けは当たるわ・・・」

「唯は苦笑して呉を見た。呉は優しく微笑み、田で零を見るよつて冗談した。

「零、久しぶり・・・。もつとも君は会いたくなかったらうけど」「まさか」

否定の言葉を発したきり、零は黙つた。

彩はどう言葉を繋げていゝものか迷つていた。零に対して言つたことは山ほどあつた。三年前から今まで溜めていた思いがある。しかし全てを言つわけにもいかないし、何から話せばいいかわからぬ。

無言のまま時は過ぎる。水野はとすると、この状況を楽しんでいた。水野はいつもこういうとき傍観者を決め込む。下手に口を挟むのは良策とは言えない、という理由より、ただ好奇心が勝ってるだけだった。

呉がぽんっと背中を押したので、唯は足を一步踏み出し、二人の間に立った。

「零はね、手紙の差出人がわかつた時、少し笑つたのよ。苦笑っぽくね」

例えるなら懐かしい友人から手紙をもらつたような、と付け加えた。

零がそんな反応をしていたとは思わなかつたため、彩は心底驚いた。表情にはつきりと表れる。

「嘘・・・

「なんで嘘？」

一步、零は近付いた。彩は椅子に座つてゐる為、逃げることが出来ない。少し体を引いた。

「嫌われてゐるかと思つたから・・・『なんで今頃』って・・・」「・・・聞いてたワケ。何もない時に手紙が来たら不思議に思うけど? 手紙が来て、正直嬉しかつた。三年前、嫌われていたのは僕の方だつたはずだから。・・・嫌いじゃない」

最後の言葉に安心して氣が抜けた彩は、前へと屈み込んだ。

零は彩が聞いていたことに対し、少しも驚かなかつた。彩の能力を考えれば可能だつた。ただ、あの時感じた意図的なモノや気配は彩だつたのか、と納得した。三年間会つていなかつたので正体が掴めなかつた。三年前ならすぐにわかつただろう。彩は暫くしてゆっくりと顔を上げた。

「そつか・・・

氣を緩めた笑顔に唯、呉、水野は驚いた。
こんな顔も出来るんだ、と。

零は以前に見た顔と変わつてないことに安心し、ほんの少し表

情が柔らかくなつた。

「久しぶり。元気にしてた？」

零特有の口だけに笑みを浮かべる笑顔で手を伸ばした。

「まあね」

何の迷いもなく手を受け取った彩は立ち上がつた。

それからあつさりと手を離し、背中に回して指を組んだ。

「僕、水野さんのトコロでお世話になることになつたんだ。『帰る場所はない』って言つたら、『ここに住めばいい』って言つてくれて。零に嫌われてもいいから、近くに住みたかった。零と唯と吳さんのいるこの場所が良かつた。水野さんもイイ人だし」

につこりと笑つて水野の顔を覗き込んだ。水野は笑つている。二人はまるで兄弟のように見えた。

8・予定

「吳さん！ 水野さん！ 決まりましたよ！」

開いていたドアから勢いよく入ってきた柴田耕平は思い切り強く吳にぶつかつた。しかし、予想していた衝撃がなかつた。

柴田が来るのを予知していた唯はすぐに吳に伝えていた為、吳は柴田を受け止めていた。柴田は顔を上げ、照れくさそうに笑つた。

「耕？」

「吳さん、すいませんでした。唯ちゃん、ありがとう。えっと・・・

「そう！ 犯人捕まりましたよ！」

その言葉に彩は思わず立ち上がつた。吳と水野は意味ありげに笑い、柴田は明るく笑つた。

「彩くん、水野さんに渡した写真、覚えてる？ 君が過去に行つて撮つて来た藍さんの写真。アレに証拠が写つていたんだよ」

後はまかせました、と水野にバトンタッチをした柴田は、目の前に立つ吳に握り締めていた資料を渡した。その厚さは柴田の努力の証だつた。

「死因の刺し傷が明らかに注射のモノだつたからね。僕が調べていたらすぐに捕まつたんだろうけど・・・上の息がかかったヤツらが担当した事件だから。ちゃんと鑑識の写真にも写つていたから証拠になるよ」

「その証拠で他殺と決定したので、すぐに自白しましたよ。杜撰過ぎる犯行でしたから」

「ね？」と資料に目を通していた吳に同意を求めた。

軽く内容を把握した吳は柴田に領き返し、彩の方へと向き直つた。強張つた表情の彩は吳からの視線を一度逸らしたが、すぐに受け止めた。

「これで終わつたんだ」

「・・・いいんですか？」この事件は政界の人たちの親の力が

かかつて未解決だつたんですよ？ あなたたちに迷惑をかけるために『ゲーム』をしたんじやない』

犯人が捕まつたのは嬉しい。しかしそのためには呉達に迷惑がかかることならリスクは大き過ぎた。唯だつて初めから殺すつもりなどなかつた。

彩はただ、零や唯たちに真相を知つてもらいたかつただけだつた。
「迷惑はかかるないよ。僕と呉を切るリスクの方が大きいからね。呉に至つてはあの人達がそれを許さないと思うし」

水野の意味深な発言に呉に、隣の柴田は溜め息を吐き、呉は曖昧に笑つた。まだ唯達が知らない謎が呉達にはあつた。

零は何かを悟つたように、呉に対して笑みを浮かべた。勘の良すぎる子だ、と呉は微妙に苦笑し、黙つているよつこと田で合図した。零は頷き、放心している彩に近づいた。

「彩、藍さんはこのことがわかつっていたんだと思つ。前田に僕の所へ来て言つたんだ。『彩のことを頼む』つて」「姉さんに力は・・・」

「なかつたよ。でも人間の持つてゐる第六感でわかつっていたんだ。虫の知らせとかあるしね。藍さんは最後まで彩のことを心配していたんだ」

静寂が辺りを包み込んだ。様々な思いが渦を巻く。

姉を思う彩の気持ち。弟を思う藍の気持ち。

従弟を救いたかった零。彩を救つた呉と唯。

全て聞いたことで、實際見て体験していないが資料を集め、彩のために動いた柴田。証拠を指摘した水野。

そう全てこれは。

「これは予定犯罪だつたんだ・・・。藍は全て知つていた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8977c/>

予定犯罪

2010年10月8日15時47分発行